私の感じたまちづくり

平成２３年８月１日から、国（内閣府）との人事交流で大山町に赴任された赤井久宣さんが、この３月でその任期を終えられました。

在任中は、企画情報課参事兼未来づくり戦略室長として、まちづくり地区会議、地域自主組織ふれあいの郷かあら山の設立、交流の場づくり、団体間の交流、移住定住施策ほか数多く地域づくりに取り組まれました。

学ぶことの多かった20か月

約1年半という短い期間でしたが、大山町の皆さまには大変お世話になりました。

約20か月という限られた任期の中で、大山町の将来のために今なすべき最も重要なことは何かを考え、自分なりに職務にまい進してまいりました。すなわち、今後、大山町では急速な人口減少、高齢化が避けられないわけであり、これに「正面から向き合う」ことが必要だと考えました。

巷では「地域を活性化しなければいけない」、「まちづくりが重要」だとよく言われます。しかし、「地域活性化」、「まちづくり」という言葉が意味するところが理解できませんでした。

しかし、たくさんの方とお話を重ねることで、自分なりの答えとして、「地域が活性化している」とは「ここに住みたいと思う人が」、「それなりに満足度を持って」、「住み続けられる状態」ではないかと思いました。

そのためには働く場、雇用というのが大変重要な要素だと思いますが、町村という規模では雇用政策、産業政策という手段は限られています。大山町民の約半数は米子市で勤務されています。その中で、我々、町という単位で「地域の活性化」って何ができるんだろうと思いました。

それでも、ここに住む人々が「自分の地域のことは自分たちでよくしていこう」という思いを共有し、ご近所で、集落間で、地区の間で「支え合い」の仕組みをつくれば、人口が減少しようが、高齢化が進もうが、「住んでいて楽しいまち」、「安全・安心に住み続けられるまち」にできるのではないかと思いました。それが「まちづくり」であり、これを行政が住民の皆さんと一緒になって進めていく、そんなまちづくりは、基礎自治体、小さな自治体だからこそ実現できることで、それにチャレンジしてこそ、小さな町村の存在意義、大山町というエリアに限定された唯一の地方公共団体というものを設ける意義があるのだと思いました。

そんな考えを持ち、集落や地区のたくさんの方とお話をさせていただきました。そこで気付いたことは、多くの町民さんが大山町の将来を憂い、地域のために何かできないか、とヤキモキされているという実情でした。すなわち、大山町には地域づくりに対する町民さんの気運がないというのではなく、地域づくりへの思いを発揮する「場所」がないことこそが課題だと感じました。

そのため、地域づくりの思いや知識・経験を発揮していただく「場所」づくりとして、まちづくり地区会議や地域自主組織の設立、交流の場づくりを進めてきました。まだまだ動きだしたばかりで、成果としては決して満足できるものではなく、道半ばで退職することは残念ですが、ここで学んだこと、単なる要望ではない「地方の声」、「地域の実情」というものを微力ながらも今後の業務に活かすことで、皆さまからいただいた御恩に報いていきたいと考えております。

最後に、この1年半の間に、大山町民の皆さまからたくさんの「ご親切」をいただきましたことに感謝を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

赤井　久宣